HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ヨハン・ペツルのフリーメイソンリー観 ―「影と光」をてがかりに ―
著者	北原，博; KITAHARA，Hiroshi
引用	北海学園大学学園論集(193)：111-120
発行日	2024-03-27

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ヨハン・ペツルのフリーメイソンリー観

――『影と光』をてがかりに――

北　原　　博

はじめに

1785年12月，啓蒙専制君主として啓蒙の実現を期待されたヨーゼフ2世によるいわゆるフリーメイソン勅令によって，それまで活発な活動を行っていたウィーンのフリーメイソンリーは急速に弱体化していった。勅令ではフリーメイソンリーを保護すると同時に，ロッジの数や会員数が制限され，メンバーのリストや集会の届け出が義務付けられるなどロッジを政府の監視下に置くことが定められていた。この勅令を受けて，ウィーンでは急遽8つのロッジを2つ（当初提案では3つ）の統合ロッジに整理する改革が実施された。勅令とそれに基づく改革を契機として，ウィーンではフリーメイソンリーをめぐるパンフレットが大量に刊行された[1]。本稿で取り上げるヨハン・ペツル（Johann Pezzl, 1756-1823）もまた匿名のパンフレット『影と光．ウィーンのメイソン文書へのエピローグ』*Schatten und Licht. Epilog zu den wienerschen Maurerschriften*（1786）を発表している。

ペツルはバイエルン出身の著述家で，1784年以降はウィーンで活動している。彼の代表作である小説『ファウスティンあるいは哲学の世紀』*Faustin oder das philosophische Jahrhundert*（1783）はウィーン移住以前に書かれたものであるが，「オーストリア啓蒙主義最初のきわめて大きな成功を収めた小説」[2]とされている。この小説は，理性の行使，寛容の精神を基本的態度とする主人公ファウスティンが，「哲学の世紀」であるにもかかわらず，いたるところで迷信・狂信・不寛容に直面しつつも，ヨーゼフ2世治下のウィーンに啓蒙の実現を認めるという小説である。この作品では啓蒙の担い手としてのフリーメイソンに何度か言及があり，イグナーツ・フォン・ボルン（Ignaz von Born, 1742-1791）を中心としたウィーンのフリーメイソンリーへの共感を読み取ることができる[3]。そして作者ペツル自身ウィーン移住後の1784年4月1日にロッジ「慈善」Zur Wohltätigkeit に加入し，85年にはロッジ「ヤシの木」Zum Palmbaum に移籍している。86年にはロッジ再編に伴い統合ロッジ「真理」Zur Wahrheit へ所属することになるのだが，パンフレット『影と光』が書かれた時点では「私はメイソンであるが，ロッジには参加していない」（4）としている。「真理」ロッジでは，1786年9月12日に，「日々積み重なっていく俗事のために［ロッジの］ハンマーを返還しメイソンリーを永続的に辞める」[4]とするボルンの辞意が紹介されると，

多くの退会者を出した。ペツルの退会も86年10月から12月の間とされているので[5]，ボルンの退会と何らかの関係があると思われる。

「ウィーンのメイソン文書へのエピローグ」という副題からもわかるように，パンフレット『影と光』でペツルはウィーンにおけるメイソンについての「パンフレットの洪水」を承けて論点を整理している。序文でペツルは勅令を機に盛んに出版されたパンフレットの悪影響を皮肉っている。ペツルは「パンフレットの洪水」が引いた後には「あちこちに悪臭以外の何も残さなかった」(3)と述べており，こうしたパンフレットが一般の読者にはフリーメイソンリーについてネガティブな印象を与えたことを示している。そして，こうしたパンフレットを，2，3の例外を除いて，出版による利益を狙ったものや特定のメイソンに対する個人的な復讐を目的とするものだとして切り捨てている（4)。ペツルは第1節でフリーメイソンリーに対する非難に反論した後，第2節ではロッジの弱点を考察し，第3節では自身の考えるフリーメイソンリーを提示することで結社の肯定的側面を考察し，最後の第4節では結論として，フリーメイソンリーが有害であるどころか啓蒙君主にとっては利益となっていると主張している。

本稿では，『ファウスティン』においてフリーメイソンリーへの共感を示していたペツルが，実際にロッジのメンバーとなり，フリーメイソン改革の混乱を経て，フリーメイソンリーをどう捉えているのかを考察する。まず，メイソンに対する非難へのペツルの反論を取り上げ，さらにフランツ・クラッター（Franz Kratter, 1758–1830）のパンフレットを手掛かりにして，ペツルがパンフレットでは言及しないフリーメイソン内部からの改革批判を検討する。これにより，「パンフレットの洪水」の背景にあるメイソンの事情を明らかにする。次に，それらを受けて第2節で取り上げられているロッジの弱点を検討することで，このパンフレットがボルンによるフリーメイソン改革路線の擁護になっていることを示す。続いて，第3節のメイソンリー論をレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729–1781）のフリーメイソン対話から理解し，最後にペツルのフリーメイソンリー論が基本的に『ファウスティン』で提示していた啓蒙の担い手としてのフリーメイソンという考え方を継承していることを示したい。

1．外部からの批判

『影と光』は序論に加え，4つの節から成り立っている。まず，第1節ではメイソンリーに対してなされてきた非難を取り上げている。ここで挙げられている非難のポイントは，①馬鹿げた儀式，②同性愛，③錬金術，④公職の占有，⑤無謬のローマ・カトリック教会による破門である。本稿では，このうち錬金術と官職の占有について言及しておきたい。

まず，錬金術と結びつけられた批判についてであるが，ペツルは錬金術が結社の本来の目的ではないとして斥ける。ヨーゼフ2世時代のウィーンのロッジへの関心は，とりわけイグナーツ・フォン・ボルンを中心メンバーとする啓蒙主義的なロッジ「真の調和」に集まりがちであるが，当時のウィーンでもメイソンリーは啓蒙主義とのみ結びついていたわけではない。メイソンリー

に対する非難として錬金術が挙げられているように，当時のロッジの中には錬金術に傾倒する者もいたのである。さらに錬金術的な面を強調した黄金薔薇十字団[6]，アジア兄弟団などもロッジに入り込んでいた。こうした状況にあって，ボルンら啓蒙主義的な傾向を持つメイソンたちはすでに 1784 年のオーストリア・グランドロッジ（Große Landesloge von Österreich）設立を機に「オーストリアのフリーメイソンリーから薔薇十字団員，錬金術師，アジア兄弟団，魔術的な結社を一掃しようとした」[7] のであるが，85 年のフリーメイソン勅令に基づく改革もこの延長線上にあった。つまり，ペツルが錬金術をメイソンリーの本来の目的ではないと切り捨てるとき，彼の立場はボルンらと同様，啓蒙主義的な立場に立っていると言える。

続いて公職の占有の問題について言及しておきたい。ペツルは『影と光』の中で，フリーメイソンが文官，武官，聖職者などの多くの地位を占めていることを否定しない。世間の批判は縁故採用にあるわけだが，ペツルは別の見方をしている。「少なくともドイツでは，ほぼすべてというわけではないが，優秀な頭脳の大部分が結社の仲間」であり，重要な公職に適した人物はたいていメイソンであるから，メイソンが公職を占めるのも驚くべきことではないというのである（16）。もちろんロッジで築いた人脈が出世に影響している場合もあるだろうが，とりわけロッジ「真の調和」には官僚や教育関係者を中心とした知識人が集まっていたのも事実である[8]。

2．「エピローグ」で語られぬメイソン内部からの批判

すでに言及したように，フリーメイソン勅令とそれに基づくフリーメイソン改革を機に「パンフレットの洪水」が生じたのであるが，そうしたパンフレットの中には，ペツルが『影と光』で反論する外部からの批判だけではなく，メイソン内部からの改革に対する批判もあった。しかしペツルは，「ウィーンのメイソン文書へのエピローグ」という副題を付しているにもかかわらず，メイソン内部で生じている批判には言及していない。実際，ペツルは序文で次のように述べている。

> 皇帝が通達の際にどのような意図をお持ちであったのか，これがどのような結果となったのか，あるいはどのような結果になるのか，皇帝は何をすべきか，あるいはすべきではなかったのか，この変革を仕向けたのは誰か，この変革は良いものかまずいものか，といった問いには，私はいかなる仕方でも口を挟まない。（4）

このようにペツルはフリーメイソン勅令自体の評価はもちろん，その後の改革についても立ち入るつもりがないことを明示している。しかし，錬金術への態度に現れているように，本パンフレットの基底には啓蒙主義的な改革路線と共通するフリーメイソン観があり，次節で検討するフリーメイソンリーの弱点への対処法は，改革の路線を擁護するものである。ここでは，背景を理解するためにも，フリーメイソン改革に伴う混乱を見ておきたい。

混乱に拍車をかけたのはロッジ再編の方法であろう。ウィーンでは既存のロッジを一旦閉鎖し，新たに統合ロッジ「真理」Zur Wahrheit,「新戴冠した希望」Zur Neu gekrönten Hoffnung が作られた。メイソン内部でのロッジ再編の経緯は，クラッターのパンフレット『ウィーンにおける最近のメイソン革命についての 3 通の書簡』*Drey Briefe über die neueste Maurer-Revolution in Wien. An einen Freymaurer zur anerkannten Unschuld in P.*(1785)[9] に詳しい。それによると，グランドマスターであったディートリヒシュタイン（Johann Baptist Karl Fürst von Dietrichstein, 1728–1808）は，各ヨハネ・ロッジの全権委任を受けた代表者たちを招集し，1785 年 12 月 20 日にロッジ再編のための会合を開いた。クラッターによれば，ディートリヒシュタインらは密かに以下の 3 点を決めていたという[10]。

（a　ウィーンのヨハネ・ロッジはすべて活動を停止すること
（b　新たに設置される 3 つのロッジには彼らによって 3 人のグランドマスターが決められ，マスターたちにはロッジの役職者を自分で選ぶことが許されること
（c　現在既に存在しているロッジの他の兄弟たちは［加入を］申請し，彼らの加入は通常の投票によって決められなくてはならないということ。[11]

兄弟の平等を謳うフリーメイソンリーでは，ロッジの役職者はメンバーの投票で行われる。それにもかかわらず，ロッジ再編に際して新たなロッジのマスターはグランドマスターらによって決められ，各ロッジの役職者の選任はロッジのマスターに委ねられていた。クラッターは，これにより「自分たちと同じ考え方の人物だけを選ぶことができる」[12] と批判している。そして，こうした人物たちによって，他のメンバーは投票により加入の可否を判断されることになる。ロッジの再編は，主導した一部のメイソンたちが自分たちの意に沿わぬメイソンの加入を排除し，ロッジを自分たちの意に沿うように作り変えようとする「寡頭制による独裁の陰謀」[13] だとクラッターはみなすのだ。そして，クラッターもこの再編劇がフリーメイソンリーの「浄化」を目的としていることを意識している。クラッターは皮肉を込めてこう述べている。

彼らは，自分たちの企てが手柄であると見せかけるためにこう言う。これは結社から高潔ではない実に多くのメイソンを一掃する唯一の手段だと。それならば高潔ではないメイソンがいるのか。それではそんなメイソンがいるとして，君たちが注意を怠り，無思慮に，メイソンリーの福祉には冷淡で，高潔ではない者たちを兄弟として参入させ，あるいは高潔ではなく，改善の余地のない兄弟たちに適切な時機にわれらの神殿の門を閉ざすことには十分に興味がなかったことは，君たち以外の誰の責任だというのか。── もし，君たちが私たちをそんな人物たちから解放してくれるのならば，君たちに恩義を感じるだろう。君たちの中に少なからずいる思いあがった有害な者たちが兄弟ではないように，彼らは兄弟ではないのだ。[14]

高潔でない人物がメイソンになっていることに対し，クラッターは，安易な加入を認めたロッジの上層部の，つまりフリーメイソンの変革を進めている当の人物たちのこれまでのロッジ運営をあてこする。そして，自分たちの責任を棚に上げてロッジの浄化を進めようとするボルンらを「思いあがった者たち」として痛烈に批判するのである[15]。

3．フリーメイソンの結社の弱点

フリーメイソンリーの弱点を考察することで，ペツルはクラッターがまさに問題とした「結社から高潔ではない実に多くのメイソンを一掃する」[16]ことを推奨する。ペツルはメイソンの結社の弱点を3点挙げている。

まずペツルが挙げる弱点は，メンバーの多さである。フリーメイソンにはよき振舞いだけではなく「活動的である」ことが求められており，どのような状況にあっても「結社の活動の最善のために何らかのことができる」のでなくてはならず，「並の精神力以上のもの」が求められるという（19f.）。そして，本来メイソンに求められるこうした資質を持った人々，選ばれた人々は古今東西とても少ないのだとする（20）。ロッジの規模が大きすぎるために，きちんと知り合えるメンバーたちは半分にも満たず，お互いがどうでもよい存在になってしまっている（20）。その結果，ロッジ内部で分断が起こり，「ロッジ活動や平和，協調，平穏，名誉を奪うロッジのペストが生じる」（21）のだという。しかし，ペツルは単に人数制限をすればよいと考えているわけではない。ペツルは，現実のロッジにはよき振舞いという点ではフリーメイソンに値するものの，本来のメイソンたるには資質を欠くメンバーが多数を占めていると考えているのだ。

メイソンリーの弱点の2点目は出費の大きさによって生じるロッジの歪みである。ロッジの空間は広く，高価な道具がたくさんあるために，「ひとつのロッジの規定通りの通常の支出は年額数千グルデンになる」という（22）。ロッジを維持するためには裕福なメンバーが必要となり，そのためにフリーメイソンの理念が歪められることになる。

> まさしくこのために，ロッジは多くのメンバーを維持し，裕福な志願者をさほど厳正には拒否せず，仲間の中の身分の高いメンバーを他のメンバーよりも極めて寛大にそして極上の扱いをする必要に迫られるのだ。（22）

ロッジ維持の必要性から，先にペツルが挙げたメンバー数の過大が生じるだけでなく，加入審査の厳格性が損なわれ，さらにはロッジの中の平等というメイソンリーの主要原則までもが歪められているというのである。これもまたロッジ内部での分断を引き起こすと言えよう。そこでペツルは道具や使用人といったロッジの活動にとって副次的な出費を抑えることで裕福なメンバーの獲得・維持の必要性を下げ，ロッジ内で生じている不平等という歪みを緩和することを提案する。ただし，興味深いことに，ロッジの会食の縮小には反対している（23）。会食は打ち解けた親密な

会であり，人々の間の隔たりを埋める ── 後述のようにこれはペツルにとってメイソンの重要な仕事である ── 有効な催しだとみなしているのだろう。

3点目は，フリーメイソンが広く知られるようになったことによる弊害である。ヨーゼフ2世の治世下ではメンバーが皇帝の啓蒙主義的改革で大きな役割を果たすなどメイソンリーが半ば公認されていたこともあり[17]，「一部には好奇心から，一部には虚栄心から，一部にはさらに少なからぬ，まさしく純粋とは言えぬ意図から」（25）メイソンリーに加入しようとする者が増大した。例えば，1781年に15人の設立メンバーで始まったロッジ「真の調和」は急速に規模を拡大し，85年の閉鎖までの間にメンバーは全部で225名となった。2点目，3点目の問題は，1番目の問題であるロッジの肥大化，それもフリーメイソンとしてふさわしくないメンバーの増大をもたらしている。

このようにペツルはロッジの抱える諸問題を指摘し，これらの問題に対する対処法として加入の厳格化を主張する。

> 諸ロッジに志願者のより入念な選択，厳格な試験を勧めることがおそらく必要だろうか。……ごく最近のいくつかの出来事や例から，こうした注意が必要だということをロッジは十分に納得させられたと私は思う。（26）

こうしてペツルはボルンらが進めたフリーメイソン改革，ロッジを減らしメンバーを削減することでロッジを啓蒙主義的な立場で浄化することを擁護する。しかも，「志願者の入念な選択」の推奨は，ロッジ再編に際して，統合ロッジへの加入の是非を投票で決めることでメンバーの選抜を行おうとしたことへの支持表明となっている。もちろん，加入の厳格化で意図しているのは結社の浄化だけではない。「ごく最近のいくつかの出来事や例から」とあるように，「ちっぽけな復讐心」（4）で仲間を攻撃するパンフレットを発表した一部のメイソンたちの排除も念頭にあるのだろう。

4．ペツルのフリーメイソン観

レスリー・ボーディは，『影と光』におけるペツルのフリーメイソンについての見解がレッシングの『エルンストとファルク．フリーメイソンのための対話』*Ernst und Falk. Gespräche für Freymäurer*（1778/80）の趣旨に従って書かれたとしている[18]。フリーメイソン対話の登場人物ファルクはロッジに距離を置いているが，フリーメイソンであると自認している[19]。レッシングにあってはロッジへの加入の有無よりも，メイソンリーに適った人物であるのかが重要なのである。本論で考察しているパンフレットの作者ペツルは，すでにロッジを退会したもののフリーメイソンとしてパンフレットを発表しており，ファルク同様，自らがフリーメイソンにふさわしい人物であると自認しているのであろう。

さて，第２対話でファルクはエルンストと市民社会について問答していく中で，国家は必然的に人々を分断することを確認する[20]。たとえ最良の国家が考案されたとしても，世界を一つの国家にすることはできないので世界は小国に分割されることとなるが，それぞれの国は気候が異なるので，結果として必要と充足が異なり，異なる風俗習慣，さらには異なる宗教を持つことになる[21]。それだけではない。ひとつの国家の内部でも人々の分断は生じる。ファルクによれば，「国家の成員がみな等しい関係にあるというのは不可能」であり，身分の違いのない国家は考えられない[22]。誰もが立法に関与するとしても等しく直接的に関与することはできないので地位の高低が生じるし，国の財産を均等に分配しても個人の資質によって貧富の差は生じる[23]。こうして，市民社会は無限に分断されていくことになる。それでは人々は分断されたままなのだろうか。ファルクはエルンストに「人間を互いに実によそよそしいものとする分裂を，再びできるだけ小さくすることを自らの仕事としているのがフリーメイソンだとしたら，どうだい？」[24] と述べ，フリーメイソンリーとは社会の抱える問題，人々の分断を解決しようとすることだとする。

ペツルもこのレッシングの問題意識を共有する。『影と光』第３節で彼は人間が生まれつき平等であるとしたうえで，実際に差異が生じている原因として「時代，文化，身体的・精神的な力の不平等」を挙げる（29）。レッシングのフリーメイソン対話では，最良の国家を想定しても人間の分断は不可避であるという思考実験であったため時代による差異への言及はないが，「時代」および「身体的・精神的な力の不平等」は，ファルクの言う風土から生じる文化的差異や個人の資質から生じる身分の差ということになろう。そして，こうした差異は，「自尊心や自己愛，専制」により許容しがたいものになっているとする（29 f.）。

ペツルもまた「政治的な争いや宗教的な争いが人々を両極へと分け隔てる。メイソンリーは，人々を再びひとつにするためにできるだけのことをする」（31）と述べており，人々の分断を解消しようとする行為にフリーメイソンリーを認める。この文だけを読めば，ペツルの考えるフリーメイソンリーもまた社会変革を目指すものであるように思われる。しかし，それに続く分断解消の具体例はフリーメイソン内部の「特典」に矮小化されてしまっている。

> […] 君たちが行きたいところへ行こうとも，メイソンの握手は社交の手形証書となる。メイソンの握手により全く知らない国や都市で初めて足を踏み入れた時から興味深い交友や心地よい歓待，仕事や気晴らしでの支援を得らえるのだ。（31）

また別の箇所でも人々の分断をできるだけ小さくしようとするフリーメイソンの行為が語られる。

> 人間を再びお互いに近しいものにする結社は，この点からだけでもすでにとても尊重すべきものである。これをなすのがメイソンリーである。それはあらゆる国の，あらゆる宗教の，

あらゆる身分の人々をひとつにする。メキシコ人とシベリアの人，ドイツ人とジャワ人，キリスト教徒，イスラム教徒，ユダヤ教徒，大臣，カプチン会修道士，そして元帥とがロッジでは互いに抱き合う。あらゆる党派の考えはお互いに許容される。あらゆる階級の理念は相互に置き換えらえる。知恵で知恵を磨く。そしてそこから一般的な結社の絆が生まれ，寛容，忍耐，伝達，率直さ，尊敬が紡がれるのである。(30)

ここで語られるのは結社の中での平等である。民族，宗教，社会的な地位や階級，政治的な意見の相違を超えた会員同士の結びつきが語られている。人々の間の分断が固定化された社会にあって，結社の中という限られた空間内部であっても平等を実現したことは，もちろん画期的な出来事であった。だが，社会変革を暗示するような表現と，まるで取り繕うかのように適用範囲を結社内部に限定したような具体例の落差に違和感を覚えざるを得ない。

社会への働きかけについてペツルはロッジによる慈善活動を列挙し，フリーメイソンリーがいかに無害なものであるのか，社会にとっていかに有用であるのかを強調している。レッシングが語るように，「フリーメイソンの真の行為は，一般に善なる行為と呼ばれるのが常であるものすべてを大部分は不必要なものとすることを目指している」のであれば，慈善活動は「一般の人の注意を引く」ための，「外向けの行為」にすぎない[25]。しかし，「おのおのが自身の立場によって判断する真理は容易に誤解されうる」から「大きな声では言いたくはない」[26]。つまり，そうした真理は黙っていたほうがよい。ペツルもまたこのパンフレットで，フリーメイソンの慈善行為という「外向けの行為」を列挙し，「真の行為」についてはレッシングを暗示するに留めている。それは大衆が真理の光に耐えられないというだけではなく（13)，「地上の権力者や民族の指導者たちにとっては，あえてそれを声高に説くのはあまりに嫌なこと」(7f.) なのである。メイソンの活動が，たとえ直接的な力の行使による社会変革を目指しているわけではないにしても，既存の社会の変革を強調し社会変革への道筋を示すことは，それはすなわち将来的には国家体制の変革プログラムを示すことになり，専制主義とは相容れない。

そしてもうひとつ，『ファウスティン』の作者がフリーメイソンリーに求めているものが啓蒙の普及であるということを確認しておきたい。

そのような野蛮，そのような不当な度を越した暴力［＝聖職者たちの支配，不寛容，狂信，迷信，理性や思想の自由の弾圧など］に対して活動することは，おそらく真の貢献であるのは疑いない。こうした貢献をメイソンリーはするのだ。それは迷信，暗闇，不寛容，精神の麻痺に対して活動する。それは，メンバーたちの文書，講演，活動によって，理性を使用することで，哲学的な自由を考え，一般に人類の長所と義務についての啓蒙を促進しようとするのだ。(28f.)

『ファウスティン』の中でも繰り返し批判されていたように，聖職者や為政者たちは，しばしば不寛容な態度を示し，民衆たちは迷信に囚われ，時には狂信に駆り立てられる。小説の主人公はしばしば民衆の暴力にさらされ，異端審問を恐れていた。啓蒙の時代はいまだ啓蒙された時代には程遠い。そうした中にあって，一部の理性的な人々は啓蒙を促進しようとしている。小説では，メイソンであるか否かにかかわらず，啓蒙を促進するひとびとが個人として，あるいは個人的なネットワークを通して不寛容に直面する主人公を支援し，彼を啓蒙専制君主の元へと導いていった。小説に描かれた啓蒙の普及は実在の結社の理想に投影される。フリーメイソン改革をめぐる混乱によりボルンが退き，自らもロッジを離れた状況にあっても，ペツルはなおもフリーメイソンリーという人間の在り方に啓蒙の促進を期待していたのである。

おわりに

フリーメイソン勅令に端を発したフリーメイソン改革は，改革の推進者であるボルンたちのフリーメイソンリーに対する考え方に従って，ロッジを啓蒙主義的な立場で浄化する意図を持ったものであった。ペツルのパンフレットは改革への直接の批評を控えながらも，改革路線を正当化する根拠を与えている。そのためにレッシングのフリーメイソンリー観を援用し，人々の分断をできる限り解消しようとすることにメイソンの行為を求めている。そして専制主義への忖度もあり，分断のない社会の具体的な制度は示されないものの，啓蒙主義的な立場に立つメイソンにフリーメイソンのあるべき姿を求め，彼らが担う啓蒙の普及という行為に期待を寄せるのである。

テキスト

[Johann Pezzl]: *Schatten und Licht. Epilog zu den wienerschen Maurerschriften*. Wien 1786.
引用に際しては丸カッコにページ番号のみを記載した。

註

1　ヴォルフシュティーク『フリーメイソン文献書誌』第1巻の「オーストリア―ハンガリー．フリーメイソンリーの歴史」の項には，1785年から86年にかけての文献として，頌歌なども含めて29点が掲載されている（文献番号12755–12783）。Vgl. August Wolfstieg (Hg.): *Bibliographie der Freimaurerischen Literatur*. Bd. 1. Burg b. M. 1911, S. 657–660.　また，フリーメイソン勅令がきっかけとなって生じた「パンフレットの洪水」については，以下の文献を参照のこと。Leslie Bodi: *Tauwetter in Wien. Zur Prosa der österreichischen Aufklärung 1781–1795*. Frankfurt am Main 1975, S. 227–233; Helmut Reinalter: *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*. Wien 1987；上村敏郎「啓蒙専制期ハプスブルク君主国における批判的公共圏の成立：フリーメイソン勅令をめぐるパンフレット議論に基づいて」『Quadrante: Areas, cultures and positions＝四分儀：地域・文化・位置のための総合雑誌：クァドランテ』No. 18（2016），145–155頁。

2　Bodi, a.a.O., S. 184.

3　拙稿「ヨハン・ペツル『ファウスティン』と反啓蒙」北海学園大学『学園論集』189・190号（2023年），49–64頁参照。

4　Hans-Josef Irmen u. Heinz Schuler (Hgg.): *Die Wiener Freimaurerlogen 1786-1793. Die Protokolle der Loge „Zur Wahrheit“ (1785-1787) und die Mitgliederverzeichnisse der übrigen Wiener Logen (1786-1793).* Zülpich 1998, S. 50. ただし，これは表向きの理由で，ゾンネンフェルスの退会と関連付けるものや（Vgl. Helmut Reinalter: *Aufklärung, Humanität und Toleranz. Die Geschichte der österreichischen Freimaurerei im 18. Jahrhundert.* Innsbruck 2017, S. 187），他のメイソンからの批判が影響しているとするものなどがある。

5　Vgl. Günter K. Kodek: *Brüder, reicht die Hand zum Bunde. Die Mitglieder der Wiener Freimaurer-Logen 1742-1848.* Wien 2011, S. 179.

6　1773 年に設立されたロッジ「3 本の剣」Zu den 3 Schwerten は黄金薔薇十字団のロッジであった。ウィーンの指導的な団員は，バチョッキ（Johann Christian Thomas Bacciochi, 1740-?），シュテープ（Johann Jacob von Steeb, ?）などである。なお，ロッジ「3 本の剣」は黄金薔薇十字のロッジであることが露見し，1781 年 9 月以降の活動は不明。Vgl. Günter K. Kodek: *Von der Alchemie zur Aufklärung. Chronik der Freimaurerei in Österreich und den Habsburgischen Erblanden (1717-1867).* Wien 2011.

7　Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei,* S. 14.

8　上村前掲論文，149 頁参照。Vgl. auch Hans Josef Irmen (Hg.): *Die Protokolle der Wiener Freimaurerloge „Zur wahren Eintracht“ (1781-1785).* Frankfurt am Main 1994, S. 12f.

9　Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei*, S. 66-72.

10　Ebd., S. 68.

11　Ebd.

12　Ebd., S. 69.

13　Ebd.

14　Ebd.

15　この結果，匿名パンフレット『ウィーンにおける最近のメイソン革命についての 3 通の書簡』の著者は，ボルンらの不興を買うことになる。ボルンを批判した別の匿名のパンフレットの出版を試みた際に，『3 通の書簡』の著者がクラッターであることが露見し，1786 年 3 月 10 日にクラッターは会食名目で呼び出されて「フリーメイソン・カジノ」で吊るし上げを食うことになる。この時の状況は，クラッターによって皮肉を交えてパンフレット『ウィーンにおけるフリーメイソンのアウト・ダ・フェ』*Freymaurer Auto da Fé in Wien*（1786）で描写されている。

16　Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei*, S. 69.

17　ヨーゼフの先代のオーストリア大公マリア・テレジアは，夫のフランツ・シュテファンがフリーメイソンであったにもかかわらず，フリーメイソンリーを弾圧している。

18　Vgl. Bodi, a.a.O., S. 231.

19　Vgl. Gotthold Ephraim Lessing: *Sämtliche Schriften.* Hrsg. von Karl Lachmann. Dritte, auf's neue durchgelesene und vermehrte Auflage, besorgt durch Franz Muncker. Bd. 13. Leipzig 1897, S. 343. 以下，同書は LM13 と略記する。

20　Vgl. LM13, S. 354ff.

21　Vgl. LM13, S. 354-356.

22　LM13, S. 358.

23　Vgl. ebd.

24　LM13, S. 361.

25　LM13, S. 349.

26　LM13, S. 352.